

舊約聖書創世記

02-KYU

海老澤文庫

耶穌降生一千八百七十八年

# 舊約聖書創世記

明治十一年

日本横濱上梓

## 創世記

### 第一章

元始ヒルムツ、小神天ヒトスヒと地ヒタチとを創造ヒツヅクれり。然て地ハ形ヒメあるく空スカイし、うりき聞きヒカルハ淵ハラハラの面モモリは上アベよ在りし。が神の靈ミツバチ木面モモリの上アベよ掩ハマフひ居ハシマフたり。ミ神明ミツバチりふれといひし。よ明ヒルムツりなりき。月ヒルムツ神明ミツバチりを善ヒツヅクしとみて神明ミツバチりと聞きヒカルとの間ヒダを分ハサウらたり。五ヒナヘ神明ミツバチりを畫ヒカルと名づけ聞きヒカルを夜ヨモギと名づけハサウけタ。あり朝ヒルムツあり第一日なり。○神木ミツバチ中に空スカイ。あり水ミツバチと木ミツバチとの間ヒダを分けよ。といひしに。神空スカイ。蒼スカイ。を造ハサウり。空スカイ。蒼スカイ。の下アベの水ミツバチと空スカイ。蒼スカイ。の上の水ミツバチとの間ヒダを分ハサウらして斯ミツバチなりき。ス神空スカイ。蒼スカイ。を天ヒルムツと名づけタ。あり朝ヒルムツあり第二日あり。○神天ヒトスヒの下アベの水ミツバチを一處ヒロに集ハサウり涸ハシマフげる土ミツバチハ顯露ヒラフべ。といひし。よ斯ミツバチなりき。ス神涸ハシマフける土ミツバチを地ヒタチ

となづけ木の集りしを海と名づけ神之を善しと視たり  
土神地と苗と種を結ぶ草と實に核ある菓を結ぶ實の樹  
を其類に隨ひ地の上に萌出せといひに斯なりき土地  
と苗と種を結ぶ草其類に隨ひ又實に核ある菓を結ぶ樹  
を其類に隨ひて出せり神之を善とみたりまたあり朝あ  
り第三日なり○<sup>青</sup>神晝と夜との間を分つふ天の空若に光  
りありて驗のため時節のため日や年のため天の空若  
に地を照せ明りのためになるべーといひに斯なりき  
神二つの大なる光りを造り晝を司どるにハ大なる光  
り夜を司どるにハ少なる光り又星を造りも地を照ら  
一晝と夜とを司どり明りと聞きとの間を分つ爲よ<sup>ム</sup>神

是等を天の空若にれだて神之をよーとみた豆<sup>ま</sup>タあ  
朝あ<sup>マ</sup>第<sup>ク</sup>四日なり○<sup>青</sup>神水は生ある動物をあまた生じ又  
鳥は天<sup>ア</sup>空若の面地の上に飛<sup>モ</sup>べーといへり<sup>ム</sup>神大いな  
る魚と水のあまた生<sup>モ</sup>る處の生ある動物みる其類に從  
ひ又統ての飛鳥其類に從ひて造れり神之をよしと視た  
リ<sup>ム</sup>神彼等を視て生め<sup>モ</sup>よ海の水に充<sup>モ</sup>よ鳥は地に生  
よどいひーに<sup>ミ</sup>ダ<sup>ム</sup>あり朝<sup>ア</sup>り第五日なり○<sup>青</sup>神地は生  
物を其類ふ從ひ生畜昆蟲又走獸其類に從ひて出よ<sup>シ</sup>い  
ひーに斯あり<sup>シ</sup>神地は懶畜うの類に從ひ生畜其類に  
従ひ土の昆蟲皆其類に從ひて造れり神之をよしと視た  
リ○<sup>青</sup>神曰吾々は像<sup>シカニ</sup>は姿の如く人を造らん彼ら

ハ海は魚と天の鳥と生畜と全地と地の上に匍匐せとあ  
の昆蟲とを皆治理んといひしに至る神已の像に人を遣り  
神の像に是を造り彼等を男女に遣れり。神彼等を祝ミ  
て神彼等に曰生殮よ地にみゑせよ之を從せよ又海の  
魚と天の鳥と地の上に匍匐とこそ生物を皆統轄よ〇  
三九神又曰みよ全地の面ふある種を結ぶ草と種類と樹の  
核を結ぶ實のある樹を皆汝等に與へり汝等よハ食どあ  
るべし。又地の走獸と天の鳥類と地の上に昆蟲都ての  
命はある物にそ食の爲ふ都ての青艸を與へて斯ありき  
三一神都て造せし處を視しに至るより最よかりけり夕高至朝  
あり第六日あり

第二章 かくて天と地なよび其軍勢みな造られたりニ  
神第七日に其造り一業を終て第七日に都べて其造りし  
業を息めり。よりて神第七日を祝みて之を聖日となせ  
り此日に神ハ作りて創造せし都べての業を息し故も  
リ。エホバ神天地と未た地に立ちざる原の都べての草  
と以まだ萌ざさざる原の都べての青物を造りし日則モ  
創造せられし時此等ハ天と地との成り立あり蓋エ  
ホバ神いまだ地の上に雨を降さば又原を耕す人もあらず  
近々惟霧地より起りて地の全面を潤せり。エホバ神地  
の塵にて人を造り其鼻の穴に命の息を吹き入れて人ハ  
生ける魂にありムエホバ神イーデンの東ふ園を植ゑ

て其處に造り一人をたけり エホバ神諸々の見るよ  
えしく食ふによき樹と園の中より生命の樹と善惡を知る  
の樹を地より生ぜさせり 又河園を潤す小イーデンよ  
りいて彼處より別れて四極源となりぬ 其一は名ハ  
ピソン金はあるハビラの全地を環るもはハ是なり ま其  
國の金ハよしそこにハブトラクヒ碧玉あり ま其二の河  
の名ハギボンクシは全地を環るもは是なり ま其三の  
河の名ハヒデケルアルシルの東へ流るもは是なり 其  
四の河ハラタエホバ神耕し守らんが爲に人を連れ來  
てイーデンの園に之を置けり エホバ神アダムに命じ  
て曰園は都ての樹心に任せて食ふべしも唯善惡を知る

の樹より食ふべからぞ 蓋汝此より食ふ日にそ必死ぬべ  
し〇 エホバ神又曰人の獨居そ宜しからず是が爲に吾  
それみ協ふ助のもはを造りんと エホバ神土獄もて原  
は都べての獸畜と天の都べての鳥を造りて其を何と名  
付るうを見んとアダムへ率て來れりアダム生物に名  
づけしとこそ各の名にもあれアダム都べての生畜  
と天の鳥と原は都べての獸者を名付しかどもアダムに  
は之に協ふ助のもはを見いださざアリエホバ神アダ  
ムに甘睡させ寐入足し時其脇肋の一つを取りて其代定  
に肉をふさぎぬ エホバ神アダムを祀取りし脇肋を女  
に造立て是をアダムに連來れり アダムいそく是ハ  
今

吾骨の下ぬ吾肉のにくなり此れ男より取りし物なれば  
女と名付けぬ故に人そは父母を離れて其妻に膠漆彼  
等ハ一體となるべし其夫婦の二人裸あるも恥る事あ  
し

第三章 エホバ神の造る原の諸生物より蛇ハ詰うて  
き彼女に曰く神園の都べての樹よぞ食ふべらうど實  
にいひしかニ女蛇に曰く園の樹の實を吾等食ふべし  
唯園の中にある樹の實を之ハ得食ふべらず又之に捶  
るべくかず恐らくハ汝等死ふんと神ハいひ賜へり 蛇  
女に曰く汝等必ず死ぬまじ 汝等夫を食ふ日にモ汝等  
の目開きれ神のごとく善惡を辨へんと神ハ知り賜へば

あり爰に女其樹の食ふによく又目み尻にく賢くある  
に慕もしき樹ありと見て其實をとりて食ひ又其友ある  
夫にあたへ彼も食へり其二人の目開きれ其裸なるを  
知り無花果の葉をあみて己が爲に腰裳となせりハ日の  
涼しき時に園みあるくエホバ神の聲をききてアダムと  
其妻ハエホバ神の前よぞ園の樹は間に身をかくせり  
エホバ神アダムを呼び之に曰汝ハづくにあらうと  
曰園よて吾雨の聲を聞き吾裸なる故に恐きて身を隠せり  
サ曰誰か汝も裸なりと告へか吾食ふ可うかと汝み命  
ぜし其樹より食ひしかアダム曰吾と共に居る爲ゆ  
が賜ひし女彼樹よぞ吾に與へしらば吾食へり エホバ

にて吾食へり青エホバ神蛇に曰汝この事をなせしカ女曰蛇吾を惑ふ汝も都ての生畜也都ての原の獸畜より詛られ汝腹にて行ん汝命のあらん限也塵を食ふべし且吾汝と女の間また汝の種と女の種の間に仇を置うん彼ハ汝の首を碎さ汝ハ彼の踵を碎うん又女み曰吾必死汝の苦勞と懷妊をまさん汝苦勞して子を生まん汝夫を慕ひ彼汝を治めんも又アダムみ曰汝妻の聲を聞き吾食ふべくか老と以ひて汝に命ぜし其樹より食ひし故に地も汝の爲に詛られ汝の命のあらん限り苦勞して之を食ひ土地汝が爲に荆棘や刺薺を生じ汝原の青物を食そんも汝地小うへ

るまで面小汗して汝パンを食ふべし汝地より取られき汝ハ塵なり故に又塵よかへるべしアダム其妻の名をエイバといへり彼群生の母たればなりエホバ神アダムと其妻のたれに皮の衣を製り彼等に着せたり○エホバ神曰ミよ人善惡を辨ふるハ吾等の一のござく成り今恐らくハ其手を伸し又生命の樹より取りて食ひ承生せんと故にエホバ神地を耕さんが爲に其地より取り人をイーデンの園よで出せりかく人を追出して生命の樹の道路を守る爲ヨイーデンの園の東角ケルビンと自ら火をもる燐の剣を置けり

ンを生めり又吾エホバによりて人を得しといへりニ  
た其弟アベルを生めりアベルハ羊牧ひなりカインハ地  
を耕すものありニ程へて後カインハ地の實を供物とし  
てエホバみ持來きりヨアベル又其羊の首生と其肥たる  
毛の毛牽きて來きりエホバアベル及び其供物をかへり  
見レガ五カイン及び其供物をウヘリ見ざり事モカイ  
ン甚だ憤りて其面がうつむき氣りエホバカインみ曰  
何故に汝怒り又何故に汝の面うむき氣るぞヤ若汝  
善を行そゝ舉られざるんやも一善を行そきば罪ハ門  
に伏せり又其慕ひハ汝にあり汝ハ之を支配せんルカイ  
ン其弟アベルみ語りき又二人田にある時カイン其弟ア

ベルに立かゞて之を殺一氣り○エホバカインに曰  
汝の弟アベル何處にあるや曰知らズ吾ハ弟のまもる毛  
のら曰何をなせ一や汝の弟の血の聲地より我に簸ベ  
リテ今汝の手より弟の血を受んが爲に口を開き一地よ  
り詛それ亟り一地を耕す時に其地汝に尙力を加へ走汝  
地に落人さまよふ人にあらんカイエホバに曰く我  
罪堪ふるよ定大いあり古見よ今日汝我を地の面より追  
よふ人になり我に逢ふ毛の皆我を殺さんエホバ之に  
曰然らす凡カインを殺すものハ七倍報をきん且エホバ  
カインに逢ふ毛の皆これを打急ヒテ微放置番り○末カ

インエホバの前より出てイーデンの東ノツドの國に居  
キモカイン其妻を知りて彼毛はラミハノツカを生め  
毛又カイン邑を建て居毛しかば邑の名成其子の名に從  
がひてハノツカと名付りさてハノツカにイラド生毛  
毛又イラドメフカエルを生ミ又メフナエルメフツシ  
ヤエルを生ミ又メフツシャエルラメクを生め毛ラメ  
ク己に二人の妻毛娶毛り一人の名ハアダ其外乃名ハツ  
イラニアアダハヤバルを生め毛之ハ幕に住みて家畜毛う  
ふ毛の父毛り其弟毛名ハニバルな毛之ハ琴や笛を  
用毛る者毛父毛りニツイラモツバルカインを生め毛之  
ハ赤銅と鐵毛すべて鐵毛刃物師毛りツハルカイン毛妹

ハナアマ毛りラメカ其妻だちに曰アダとツイラ我聲  
きけよラメカ妻だち我が詞をきけよ故ハ我わが疵に人  
を殺一毛又我害に若き人を殺毛た毛若カインハ七  
倍報は毛んみはラメカハ七十七倍なるべし○さてア  
ダム又其妻を知りて彼毛子を生めり其名をセイタと名  
付けり蓋カイン殺せしアベル毛代りに神一つ毛種を與  
へしといへりニ古又セイタに毛子ハ生れた毛其名をエイ  
ノシと名付毛其時エホバ毛名を呼ふことを始めたり  
彼等毛造られし日み彼等毛名をアダムと名付事毛〇

アダム百三十歳いきて己代像に己代形代如く子を生み  
彼代名をセイタと名付<sup>スル</sup>セイタ生ミし後アダム代  
日も八百年なり彼れ息子息女をうめ<sup>スル</sup>アダム代生存  
へし都て<sup>スル</sup>日も九百三十歳にして死せり<sup>スル</sup>セイタハ百  
五歳生きてイノシを生め<sup>スル</sup>セセイタハイノシを生ミし  
後八百七歳いきて息子息女をうめ<sup>スル</sup>セイタ代都て<sup>スル</sup>  
日も九百十二年に<sup>スル</sup>死せり<sup>スル</sup>イノシ九十歳生きてケ  
イナンを生めり<sup>スル</sup>イノシハケイナンを生ミし後八百十  
五年生きて息子息女をうめ<sup>スル</sup>イノシ代都ての日ハ九  
百年にして死せり<sup>スル</sup>ケイナン七十歳生きてマハラレル  
を生め<sup>スル</sup>ケイナンハマハラレルを生ミし後八百四十

年いきて息子息女<sup>スル</sup>残生めり<sup>スル</sup>ケイナンの都ての日ハ九  
百十年みみて死せり<sup>スル</sup>マハラレル六十五歳いきてヤレ  
ドを生めり<sup>スル</sup>マハラレルヤレドを生ミし後八百三十年  
生きて息子息女を生めり<sup>スル</sup>マハラレルの都ての日ハ八  
百九十五年にして死り<sup>スル</sup>ヤレド百六十二歳生てハノカ  
を生<sup>スル</sup>ヤレドハノカを生ミし後八百年いきて息子息  
女を生めり<sup>スル</sup>ヤレドの都て<sup>スル</sup>日九百六十二年に<sup>スル</sup>死  
せり<sup>スル</sup>ハノカ六十五年いきてミツシヤラを生めり<sup>スル</sup>ハ  
ノカミツシヤラを生ミし後三百年神と共にあゆみて息  
子息女を生<sup>スル</sup>ハノカの都て<sup>スル</sup>日三百六十五年なり<sup>スル</sup>  
ハノカ神と共にあゆミ神之を祀<sup>スル</sup>故みをり<sup>スル</sup>ミツ

シヤラ百八十七歳生てヲメカを生むミツシヤララメ  
カを生し後七百八十二年いきて息子息女を生みリミ  
ツシヤラの都てヒ日九百六十九年にして死せりニトラメ  
ガ百八十二歳いきて子を生めリニナメカの子の名をノアと名  
づけて曰これエホバヒ詛ひし地の故にて我等の操作と  
勤勞より我等を驅さめむとヨラメカノアを生し後五百  
九十五年いきて息子息女を生リヨラメカの都べてヒ日  
モ七百七十七年にして死せりヨリノア五百歳もしてセム

ハムヤベトを生みリ

第六章 一人地の面に蓄江そめて女どもハ彼らに生を事有り一に神ハ息子ども人の息女どもを美なると見

てそべて撰びし處ちり已に娶り事ればミエホバ曰我靈  
永遠に人をたゞさじ彼毛肉なりされど其日百二十年な  
らんと其時大いなる人々地にあり又神の子ども人の  
娘に來りて後かきりみ子どもを生めり其子どもは強き  
人となり古への名ある人なり○エホバ地にある人比  
惡の大きいなる事と其心の念のはかる處も皆毎日凶惡  
れども三通りエホバ曰我造りし人を地のおおてより拭ひ空ら  
ん人をり開昆虫天の鳥に至るまで我これらを造りしを  
悔ゆるゆゑなり只ノアハエホバの目は前に恩を得た  
り○ノアハ是なりノアを義なる人其時代に全

くしてノアと神と與ふあゆ先りノアの三人の子セム  
ハムヤベトとを生めり。地ハ神代前に壞れて地強暴に  
ニ姦されり。神地をみて是壞れ姦り地代上の肉ばミな  
其道を壞れ。故なり。神ノアに曰都べて代肉代終りハ  
我前に來れり彼等み因て地代強暴にニ姦さればありみ  
よ我地と共に彼等を亡ぼさん。汝が爲にゴベル木代方  
舟を造れ方舟代うちに房を作りて瀝青をもて内外を塗  
べし。汝代造るべきは是あり方舟代長さは三百臂。代  
幅五十臂。代高さは三十臂。方舟に明り取りを作りて  
上より一臂にしまふべし。方舟代門を傍はらに置べし。其  
に下二階三階を造るべし。ミよ我其天の下代命代氣あ

る。すべて代肉を亡ぼさんとて洪水代水を地上に來ら  
せん地にある都べて代も代消失せん。唯我汝と共に我  
約を立てん。汝と汝代息子汝代妻汝代息子代妻汝と與に  
方舟に來るべし。又都て代肉の諸生物代諸類より二ツ  
を汝と共ふ生る爲めに方舟に入べし。彼等は牝牡なる  
べし。鳥其類に從がひ生育其類に從がひ土の諸昆虫其  
類に從がひて諸類より二つ次生ける爲に汝小来るべし  
。汝は食る。都て代食物より汝にせり。又汝に集め夫は  
汝と彼等の爲よ食物となるべし。ノア悉く神の己に命  
せしにしたがひてうくるし姦り

を見一故に汝と汝の家族皆方舟に來たれ。汝都べて清  
きけもば牝牡七つづ、清うらぎるけもの牝牡二りづ、  
天の鳥雌雄七りづ、汝どろべし全地の面に種はい  
る爲めなり。蓋七日後我四十日四十夜地に雨ふふ  
せ我つくり一處のもばを皆地は表よりぬぐひどらん。  
ノアエホバ社とじごとく命するに一氣がつてなせり。六  
水は洪水地にある時ノアハ六百歳なり。七ノア其子其妻  
其子は妻己と偕に洪水は水によりて方舟のうちにいり  
ぬ八清き生畜と清からざる生畜と鳥とモべて地の上よ  
這ふもば九神ノアに命ぜしごとく牡牡二りづ、方舟の  
中みノアに來れり。十七日の後洪水は木ハ地の上にあり

一あり十一ノアの命六百年は二月其月の十七日とば日大  
淵は源ミな破れ天の窓開うれて。十四十日四十夜雨ハ地  
の上に有りだ。十二同じ日みノアとノアの子とモセムとハ  
ムとヤベト又ノアの妻と子とモセ三人の妻彼等と共に  
方舟の中に入りあり。彼等とモべては生物其類に從が  
ひすべて地に創ふ昆虫其類に從がひすべては鳥其類に  
從がひそまさまば羽の都べての鳥なり。十五都て命の氣あ  
る肉は二りづ。ノアみ方舟にいりあり。其いるをは  
神ノアに命ぜ一ごとえすべての肉はめすをす入をたり  
エホバ此を内み閉めり〇十六洪水ハ四十日のあひだ地の  
上みあり。水ハふは方舟をあげて方舟ハ地の上みあげ

られたり。水まさて地せよにばなだふに方舟ハ水  
は面にたゞよへり。水地のよへに甚だ多くまざりて天  
の下にある高き山ハみな覆それたり。水ハ十五臂上に  
まざりて山ばおそれあり〇。地の上小動く都べての  
肉死せり。則鳥と畜と走獸と地の上にすべてそふ昆  
虫とすべて人と都て鼻に命の氣けいきあるも皆  
陸にあるも死したり。地の表にあるすべて生る  
色れぬぐひとられぬ。則人も畜も昆蟲も天の鳥も地よ  
りぬぐひとられ。唯ノア又彼と共に方舟にあるを死ハ残  
されたり。水地の上に百五十日まどりたり。

第八章

ノア及びノアと共に方舟にある都べての生

物とぞべて畜をおもひやりて神風を地の上に吹せし  
かば水減りぬ。淵の源と天の窓とを基がれて天よりの  
雨やめられ。水ハ地より流れかへり退そき百五十日を  
そり水をひきけり。七月において月の十七日より方舟を  
アラ、トの山の上に止まり。水十月まで絶に走ひき  
十月の一日より山の峯顯それたり〇。四十日のをは定  
にノア造立。方舟は窓をひらきたり。鳥を放ち出せり  
よ水の地より乾くまでからずそいで、行きかへり  
一急り。又水地のれもてより減りしやいなやをみると  
てれのれよ足鳩を放ち出せり。全地の表に水あるが故  
に鳩そば足のひらで休む處ろを見つけ立して方舟に在

るノアへうへれど時にノア其手をいだし之をとりて方舟に己に來らせたり + ノア又他の七日を待ちて再たび鳩を方舟よど放ち出せしに上鳩タベにノアにうへれり見よ其嘴よついばミ取豆一撒欅の葉ありノア水の地よ豆減しを知りミノア又外の七日をまちて鳩召出せしにそ心ハふた豆ひノアへかへうざりき○<sup>主</sup>六百一年の<sup>主</sup>月一日な地の上よ豆水乾きしかばノア方舟のあたをうつゝ見るにみよ地のおもては乾きたり<sup>音</sup>二月に於て月の二十七日地ハかわきたり○<sup>主</sup>神ノアふ言ふて曰汝と汝の妻也汝の子と子の妻と汝とやもに方舟よ豆てよまた汝と共にあるとてて肉の諸生物則鳥と生畜と

地の上にそふ昆虫と皆汝とやもに引き出せよ彼等地に多く生じ地の上よ殖増さんが氣充ありノア其子其妻其子の妻已と共にいてたりそべての生物すべて昆蟲都べての鳥都べては地の上に道ふ毛の各そぞ類に隨ひて方舟乞豆出たり○<sup>主</sup>ノアエホバみ壇をたて都べては清き生畜より都べての清き鳥よ豆どりて壇の上に燔祭を捧げたりエホバ其馨一丸香豆潔臭きエホバ其心に以ひ事る者人よために又重ねて地に崇るまじ人よ思ハそけ幼きよ豆思しき故な豆又我なせし如く都べての生物を重ねて罰まじ地の都べては目みりるまで種まく時かる時寒さ暑さ夏冬晝夜息まむ

## 第九章

神ノアと其子を祝て彼ら小曰く生蕃よ地を充

せよ。汝らはをうれどおのゝきやそ地の都の獸と天の都の鳥け上と都地を仰るものけ上と生物の上と都海の魚け上にあらん汝らは手み任せられ急りミ都の生る動物そ汝らにそ食とあるべし蔬菜けごとく我みな汝らみあたへり。然肉を其生命をあはし其血と共に食ふべらば。又爾うけ生命の血をば我求めん我都の生物の手より又人の手より之を求めん我各の人比兄弟の手より人の生命を求ん。人比血を流逝もけハ其血も人に流され加何なれば神の像み人成造りセ汝う生蕃よ地に數多生ぜよそこにつへよ。○ハ神ノアと共よある其子に謂て曰

く。我みよ我ハ汝と汝の後代種と共よ我契約を立ん又汝と共にあるそべての生物と鳥と生畜と汝と偕にある地のそべての生物を方舟よと出しそべてのもけより地のすべての生物にいたる迄然るあり。汝と共に我契約を立てん又洪水の水にてそべての肉をほぬぼざるまじ又地を滅ぼすの洪水をあわまじ。神いわく我と汝と汝と共にあるそべての生物の間に永世まで我立し契約の志る。ハ此あり。我虹を雲みおうん我と地の間の契約の志る。我と汝そべての肉のそべての生物の雲に見へる。あらん。我と汝そべての肉のそべての生物の間にある我契約をおぼへん又そべての肉を亡すに水を

洪水に再びなるまじ虹雲よりあらん神と地の上にある都の肉はもべての生物の間にある永生の契約を記憶んがた先に之をみんも神ノアのみ曰く我と地の上にある都の肉の間に我立し契約のある一ハこれなりオ方舟より出しノア父子セムハムヤベトありハムとカナンの父なり此らはノアの三人の子あり此らも又全地に布れありノア農夫を始めて葡萄園をうへあり彼葡萄酒を飲ミ醉て幕の内に裸てありたりカナンの父ハム其父の裸うなるを見て外にある二人の兄弟ふ告セムとヤベト衣をじとて己れの肩に付せてうし法にあゆみて其父の裸なるをれふひ其面をうしひにむけて父の裸せり

第十章 一 僕ノア父子の系図ハ此な定セムハムヤベト洪水後是等に毛子ハ生れありニヤベト父子ゴメルとマゴクとマダイヒヤワヌとトバルとメセクとテラアスヨママル父子ハアシケナズトリバタとトガルマヨヤリス

あるを見ざりキノア其葡萄酒よどと見て其小き子のみなせしを知りて曰くカナンをたゞるべし其兄弟に僕の僕にならん又曰くセムの神エホバと祝るべしカナンハ彼の僕にならんモ神ヤベトを廣むべし彼セムの幕におらんカナンも其僕にならん○洪水の後ノア三百五十年いきノア父子の都の日九百五十年にして死せり

此子ハエレシアとタルシ、とキテムとドダニム<sup>五</sup>これ  
らよ定國々此島其地に於て分れたり各其國<sup>五</sup>み於て其言  
語に從<sup>六</sup>がひ其家族<sup>七</sup>に<sup>六</sup>此<sup>八</sup>がへり○<sup>九</sup>ハムの子ハクシ<sup>十</sup>  
ミツライムとフトとカチンセクシの子ハセバ<sup>十一</sup>とハビラ  
とサベタ<sup>十二</sup>とラーマとサベテカ<sup>十三</sup>とラーマの子ハシバ<sup>十四</sup>とデ  
タンス又クシハニムロードをうむこれをじめて地に於  
て強<sup>十五</sup>きも此<sup>十六</sup>とあれり<sup>十七</sup>とれエホバの前につよき獵者<sup>十八</sup>な  
り故にエホバの前につよき獵者<sup>十九</sup>ニムロードのごや<sup>二十</sup>と  
云<sup>二十一</sup>きたり<sup>二十二</sup>其王國<sup>二十三</sup>の始<sup>二十四</sup>りバシナルの地にあるバベル<sup>二十五</sup>と  
エリク<sup>二十六</sup>とアカト<sup>二十七</sup>とカル子なり<sup>二十八</sup>此地よりアシル<sup>二十九</sup>出てニ  
子ベジリボビル<sup>三十</sup>とカラ<sup>三十一</sup>又ニ子ベジカラの間<sup>三十二</sup>レイゼ

ン<sup>一</sup>をたてり此<sup>二</sup>ハ大<sup>三</sup>なる首府<sup>四</sup>なり<sup>三</sup>ミツライムハルテム  
とアナミムとレーハビムとナフトヒムと古バトルシム  
ヒカルヒム<sup>五</sup>(カスルヒムよりビリシステム<sup>六</sup>づるあり)又  
カフトリム<sup>七</sup>と生り○<sup>八</sup>カナンハ其家子シドン<sup>九</sup>とヘト  
ヒ<sup>十</sup>を生めり<sup>十一</sup>エブシ人<sup>十二</sup>アモリ人<sup>十三</sup>とキルガシ人<sup>十四</sup>とモリ  
ヒ<sup>十五</sup>人とアレキ人<sup>十六</sup>シニ人<sup>十七</sup>とアルハデ人<sup>十八</sup>とツマリ人<sup>十九</sup>と  
ハマテ人<sup>二十</sup>を生り後にカナン人<sup>二十一</sup>此家族<sup>二十二</sup>ハ布れ<sup>二十三</sup>此<sup>二十二</sup>カナ  
ン人の境<sup>二十五</sup>ハシドン<sup>二十六</sup>よりゲラル<sup>二十七</sup>へゆくに老ガザにいたり  
ソドマガモラアドマゼボイム<sup>二十八</sup>へゆくに老ラシヤにいた  
るなり<sup>二十九</sup>此<sup>三十</sup>をハムの子なり<sup>三十一</sup>其地<sup>三十二</sup>と其國<sup>三十三</sup>に於て其家族<sup>三十四</sup>  
と其言語<sup>三十五</sup>にし<sup>三十六</sup>此<sup>三十七</sup>をハムの兄なる兄弟エブル

の都代子の先祖なるセムにも子は生をたりセム代子  
ハエラムとアシルとアルバクサドとルドとアラムアリ  
ラム代子はウツとホルとゲテルとマシアルバクサド  
セラをうみセラエブルをうめりエブルにモ二人代子  
生れあり一りは名ハビレグ其日に地わうれしゆへなり  
其兄弟の名ハヤカタンなりヤカタンハアルモダド  
シャレフとハツアルマベトとヤラとハドラムとウザ  
ルとデクラとラバルとアビマエルとシバとヲビル  
とハビラとヨバブを生り此らミアヤカタン代子なり  
其居室ニメサより行くにモ東の山ヒセバラに至る  
なり此らハ其地ふ於て其國と家族と其言語にしたが

つてセム代子なり此らは其國において其系圖み従つ  
てノア代子の家族なり此らより水の後に諸國ハ地に  
分れあり

第十一章

全地代口

一にして言語も一あり是等東より旅するシナル代地みて平地を見つけここに居し人々互み云けるはいざ我等はかわうを作りよくやくべしじ石の代りに彼等みかわうあり又煉石灰代りに彼等にアスバフルトありし又いゝけるいざ我等の爲に首府と天よ空々く頃のある塔をたつべし且我等の爲に名をなし全地は面み我等はちうされざる恵光ありエホ人代子どもたつる所の邑ヒ塔ヒをみんじて

之だより エホバ 云くみよ 民ハ 一にして 哉一の口あり  
かれり こを欲なし ばじせたり 今其なさんせはうる 宝  
法を彼等よ 禁止らるこせなし せいざ 我々をだりて 各自  
それを色は 口戒理會ぬ ように そこに 彼等の口を混亂ん  
どス そえエホバ そこよを 全地の もてに かれらをちう  
勢くろば 彼等首府をたつることを やめたり 是故にそ  
れ名を バベルと云り エホバ そこに 全地の こ空ばを混亂  
て そこより エホバ 彼らを 全地の れもてに ちうへれれば  
ありセム 代系圖ハ これあり + セム 百歳にして 洪水の後  
二年 アルバクサドを うめり + セム アルバクサドを うみ  
し 後五百生 息子 小女を うめり + アルバクサド三十

五年生テ サラを うめり + アルバクサド サラを うみし 後四  
百三年生テ 息子 小女を うめり + サラ 三十年いきて へべ  
ルを 生リ + サラ へベルを うみし 後四百三十年いきて 息子  
小女を うめり + へベル 三十四年いきて バレグを うめり  
も へベル バレグを うみし 後四百三十年いきて 息子 小女  
を うめり + バレグ 三十年いきて ルーを うめり + バレグ  
ルーを 生リ 後二百九十年いきて 息子 小女を うめり + ルー  
三十二年いきて セルグを うめり + ルー セルグを うみし 後  
二百七年いきて 息子 小女を うめり + セルグ 三十年いきて  
ナホルを うめり + セルグ ナホルを うみし 後二百年いきて  
て 息子 小女を うめり + セルグ ナホル 二十九年いきて テーラを

うめりニミ ナホルテ一ラを生し後百十九年生て息子小女  
をうめりニミ テ一ラ七十年生てアブラムナホルハラン  
生り○ニモさてテ一ラの系圖ハこれなりテ一ラアブラム  
ナホルハランを生りとてハランロトをうだりニミ ハラン  
ハ其父チカ テ一ラの前に生スル地カタをなぞちカルダヤ人のウ  
ルみて死せりニミ アブラムとナホル己に妻をめどれりア  
ブラムはつまの名ハサライナホルは妻の名ハミルカハ  
ランの娘ふりハランハミルカの父又イスカの父ありニミ  
サライハうまづめにして此み子なしミ テ一ラハ其子ア  
ブラムと其子は子もあそちハランの子ロトと其嫁サラ  
イ花ハナをなぞり其子アブラムの妻をとて是等と共にカナ  
一ラハランに死せり

ンは地へ行んとてカルダヤ人のウルより出ハランまで  
至りてそこに居れりミミ テ一ラは日ハ二百五年にしてテ



95-91134

21334  
12-1988

